

【ポスター発表】

## ひきこもり状態の子どもをもつ親がカフェにおいて得られる支えとは

— 「ひきこもり」カフェのエスノグラフィー —

○ ルーテル学院大学 氏名 酒井真理子 (010209)

キーワード：ひきこもり状態の子どもの親・支え・「ひきこもり」カフェ

## 1. 研究目的

15歳から64歳のひきこもりの人は推計で約146万人であることが報告されている（内閣府 2023）。このような状況の中、家族が支援を担うというケースがほとんどであり、ひきこもり状態の人の長期化や高齢化に伴い家族の負担は大きい。しかしながら、社会的支援が未だ十分に整備されているとは言い難く、家族が問題を抱え込まざるを得ない状況から家族成員の中でも親の精神的な健康度は自ずと低くなることが推察される。こうしたことから、ひきこもり状態の人への支援と親への支援の両輪でのケアが必要であるといえる。

2018年度からは、ひきこもりサポート事業が始まり、居場所づくり、相談窓口の設置、当事者会・家族会開催等の事業が各市町村において実施されている。そのうち、家族会は知識の習得、癒しや心の安定が得られる場としての機能があり、重要な事業の一つに位置付けられている。会員の高齢化、メンバーの固定化等様々な課題を抱えながらも、家族会は家族教室やセミナー等のほかにも居場所づくりを行っている。そのほとんどがひきこもり状態の人を対象とした居場所であり、当事者や家族に限定せず地域の人等誰でも参加可能としている地域共生を目指す居場所はわずかに見受けられる程度である。我が国では地域づくりに向けた支援として世代や属性を超えて交流できる居場所の確保等が推進されており、ひきこもり状態の人やその親等の多様な立場の人々が集まるコミュニティカフェ（以下「ひきこもり」カフェ）は、新たな地域の社会資源となり得る可能性があると考えられる。

しかしながら、ひきこもり状態の人や親が通う地域共生型の居場所の研究はほとんど見当たらない。また、ひきこもり状態の人の居場所の必要性和家族会や家族教室の重要性はこれまでの知見で提示されてきたが、家族会等ではない居場所における人々の支え合いや課題を明らかにしたうえで、親の支援に言及している研究も見受けられない。そこで、本研究においては、ひきこもり状態の子どもをもつ親が、「ひきこもり」カフェで、どのような支えを得ているのか、について探ることを目的とする。

## 2. 研究の視点および方法

本研究は、エスノグラフィー法を採用し参与観察とインタビュー調査を行った。期間は2023年1月より2025年4月まで約2年間、月3、4回のペースで観察を実施した。調査対象はNPO法人が運営する「ひきこもり」カフェであり、ひきこもり状態の人、このような子どもをもつ親、ひきこもりではないが生きづらさを抱えた人や一般の人、そのような立場のボランティアが参加している。社会構成主義的グラウンデッド・セオリー・アプローチ

チを用いて分析し、ひきこもり状態の子どもをもつ親と他者との相互行為において親に対する支えが現れているエピソードをフィールドノートからとり上げて、同一人物の通時的変化にも着目しながら焦点化しカテゴリーを概念化した。なお、インタビューからもコードを取り上げ同様の手続きを行った。本研究では、ひきこもり状態の子どもをもつ親に焦点を当てて、親が他者から得られる支えはどのようなものかを問いとしてもつ。

### 3. 倫理的配慮

ルーテル学院大学研究倫理委員会の承認（申請番号 23-1）を得た。対象の責任者及びインタビュー対象者には研究の主旨・方法・倫理的配慮を明記した文書を使用し、口頭で説明したうえ同意を得た。参与観察の対象者には都度、口頭で説明し同意を得ている。また、プライバシーに配慮し、調査対象者の名前は仮名を使用している。なお、日本社会福祉学会の「研究倫理規程」に基づき配慮しており、本発表に関連して、開示すべき COI はない。

### 4. 研究結果

支えの現れているエピソードを分析した結果、4つのカテゴリー(カテゴリーを【】で表記)が得られた。一つ目の【問わず語りの時間を紡ぐ】では、親はカフェにおいて同じ立場の親やひきこもりの人、一般のカフェ参加者等に対して語りの吐き出しを経験する。聞く側は「相手の話を否定しない」というカフェのルールに沿って話を遮ることなく最後まで聞くことで、親はここに居てもいいと実感し承認を得ている。二つ目の【ポジティブな思考への導き】では、励ましの言葉により「自信がついた」と語り親は自己肯定感が促進されたり、一般の高齢利用者からの「良かったね」等のポジティブな言葉かけと握手を求める等の非言語的コミュニケーションにより親の前向きな思考への変容が見られた。三つめは【橋渡しとしてのつながり】であり、カフェにおいては、共通する情報が時間の流れの中で、あるいは状況次第でカフェという空間を超えて人から人へとつながっていく様相が観察される。ここではひきこもりの人から親、そして他の親へ等、立場を超えて繋がっており、親は「橋渡しの役目」と語りそこには他者から必要とされるという実感が伴っていた。四つ目は、ひきこもりの人のネガティブな言葉により傷つくこともあるが、時間の経過と共に自身の子どもの【オーバーラップからの気づき】があり理解を深めることが可能となっていた。以上のように、様々な立場の参加者からの多様な支えが見受けられた。

### 5. 考察

「ひきこもり」カフェにおいては、家族会のような同じ悩みを持つ親同士だけでなく多様な参加者から支えを得られる可能性のあることが示唆された。さらに、参加を重ねることで、親を含めた参加者は支えることが自明になり、そのことに気づかない人も一定数存在する。こうした緩やかな支えこそが親にとって重要な意味をもつことも考えられる。特に、「ひきこもり」に関連がない一般の人からの支えがあったことは、地域づくりの支援を推進する我が国において、共生型の「ひきこもり」カフェの存在意義が示されたといえる。今後は「ひきこもり」カフェにおける親の支えについての課題をさらに深める必要がある。